

「教育臨床総合研究21 2022研究」

小中連携を通した主体的に英語を学ぶ子どもの育成

Motivating Students for Learning English
Through Cooperation Between Elementary and Junior High Schools

天 野 圭 吾*

Keigo AMANO

猫 田 英 伸**

Hidenobu NEKODA

大 谷 みどり*

Midori OTANI

要 旨

「令和元年度 公立中学校における英語教育実施状況調査」(文部科学省, 2020a)によると, 協働授業実践を含む小中での連携したカリキュラム作成をしている割合は17.7%とかなり低い。島根県奥出雲町のコミュニティの小ささを活かした外国語指導における小中連携を通して, 小学校教員と中学校英語教員が協働授業実践をすることにより, それぞれの教員の良さを引き出し, 子どもたちの外国語学習への主体性を伸ばすことを目指した。また, 小学校外国語授業の視点や要素を踏まえた中学校での英語授業を実践し, それらの効果をアンケート調査や授業観察を通して検証した。

〔キーワード〕 小中連携, 協働授業実践, 主体的に英語を学ぶ子どもの育成

I はじめに

本研究は, 筆頭筆者(以下筆者A)が勤務する奥出雲町立仁多中学校(以下, 仁多中学校と略記)と同校校区内の五つの小学校での授業実践を通した実践研究である。

平成29年版 学習指導要領の改訂により, 外国語によるコミュニケーション能力育成を目指して小学校3・4年生で週1回の「外国語活動」の授業が設置され, 5・6年生はそれまで週1回の「外国語活動」が週2回の「外国語科(英語)」として教科化された。

文部科学省(2017)は, (平成20年の学習指導要領改訂により導入された)小学校での外国語(英語)教育の充実により, 児童の高い学習意欲, 中学生の英語教育に対する積極性の向上といった成果が認められたが, その一方で, 学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や, 学校種間の接続が十分とは言えず, 進級や進学をした後に, それまでの学習内容や指導方法等を発展的に活かすことができないといった状況も見られると指摘している。

* 島根大学教職大学院

** 島根大学教育学部

II 研究の背景と目的

社会の急速なグローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。平成29年版 学習指導要領の改訂により、外国語によるコミュニケーション能力育成を意識して小学校3・4年生で週1回の「外国語活動」の授業が初めて設置され、5・6年生はそれまで週1回の「外国語活動」が週2回の「外国語科（英語）」として教科化された。

文部科学省（2017a）は、小・中・高等学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から、児童生徒が、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするための小中高の一貫した取り組みが必要であると論じている。

また、文部科学省（2017b）は、（平成20年の学習指導要領改訂により導入された）小学校での外国語（英語）教育の充実により、児童の高い学習意欲、中学生の英語教育に対する積極性の向上といった成果が認められたが、その一方で、音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題があることが見えてきたとしている。また、小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に活かすことができないといった状況も見られると指摘している。

本研究の目的は、小中連携を通した小学校教員と中学校英語教員の授業の協働実践と小学校教員への意識調査、児童生徒の外国語（英語）学習についての意識調査を通して、主体的に外国語（英語）を学ぶ子どもの育成とその検証、教材開発をすることである。

III 先行研究の検討

「令和元年度 公立中学校における英語教育実施状況調査」（文部科学省、2020a）によると、小中学校の連携に関する状況について、小学校との連携に取り組んでいる中学校は全国で82.0%、そのうち情報交換を実施している学校の割合は73.8%、交流を実施している学校の割合は56.0%である。平成21年の同調査における小中連携を行っている中学校の割合が55.5%だったことを振り返ればこの10年間で小中連携は進んでいると言える。「小中連携」という大枠で捉えれば8割の中学校が小学校との連携を進めているという状況は多いように見えるかもしれない。しかし、その連携の回数や内容には大きな開きがある。互いの授業参観や年間指導計画の交換といった情報交換や授業参観後の研究協議と言った交流をしている学校数と比較して、実際の授業の協働実践を含む小中連携したカリキュラム作成をしている割合は令和元年度でさえ17.7%とかなり低い。

直山（2020）は、小中連携の最終段階として「環境」、「目標」、「学習内容」、「指導法」、「教材」、「学習評価」を含む「小中連携したカリキュラムの作成」を挙げている。筆者Aの求める小中連携はこの段階であり「授業の協働実践を通したカリキュラムの協働作成」である。

三浦（2017）は、神奈川県藤沢市の小中連携として、外国語（英語）の指導経験が少ない小

学校教員に中学校英語教員が指導法・評価などの観点からサポートすることで、小学校教員が外国語の授業に少しでも自信をもって取り組むことができるようにするための市の取り組みを紹介している。小学校英語専科教員として南足柄市内の小学校を1日ずつ回り、担任教員との授業の協働実践をしてきた中村（2010）は、小中両校の交流の必要性和特に中学校英語教員に、奮闘している小学校教員のサポートをしてほしいと訴えている。

川上（2014）も、中学校英語教員が小中連携を通して、授業参観をしたり、授業に入って小学校教員と一緒に授業実践したりすることによって小学校での学習内容を把握し、中学校でそれらを踏まえた英語教育を実践することができるかと述べている。それにより、学習者が中学校入学後も戸惑いなく学習を継続することができるとしており、その点において筆者Aの実践研究における小学校での小学校教員との協働授業実践や、中学校における小学校外国語（英語）教育の要点を活かした授業実践によって期待する効果と一致している。

IV 小中での実践研究

1. 2年間の計画

本研究は2年間を通しての取り組みである。小中連携を通して児童生徒が主体的に外国語（英語）学習に取り組むために、島根県奥出雲町という小さいコミュニティを活かした小中学校の教員による指導内容の共有と情報交換、小学校外国語（英語）の協働授業実践、さらに中学校英語教員である筆者Aが小学校の外国語（英語）教育の要点を活用した中学校での英語の授業実践を行った。児童生徒の学習の様子の見取りや授業の振り返りシートの記述、また、それぞれの校種および段階において小中連携の活用による変化を、児童生徒の振り返りやアンケートによる意識調査、小学校教員への聞き取りや意識調査を通して検証し、今後も実現可能な形で小中連携の理想的な在り方を模索することにした（表1）。

本稿では、研究1年目の小学校での実践をPilot Study、研究2年目の小学校での実践をMain Study1、さらに、研究2年目の中学校の実践をMain Study2として記述する（図1）。

表1. 2年間の実践研究の流れ

R2年度6月	奥出雲町内仁多中学校校区のA小学校で協働授業実践実施
9月	協働授業実践校としてM小学校、F小学校の2校追加（合計3校）
11月	協働授業実践をしている小学校5・6年生に意識調査実施
1月	協働授業実践校MZ小学校、K小学校の2校追加（合計5校）
3月	協働授業実践をした小学校教員への意識調査実施（1回目）
R3年度4月	小学校教員に中学校英語教員との授業協働実践についての希望調査実施
4月中旬	5校の小学校での定期的な授業協働実践開始、仁多中学校での授業実践開始
4月	中学1年生に英語授業についての意識調査実施（1回目）
7月	協働授業実践をしている小学校児童に中学校英語教員についての意識調査実施
	協働授業実践をしている小学校教員への意識調査実施（2回目）
9月	中学1年生に英語授業についての意識調査実施（2回目）
	中学1年生にインド人国際交流員を招いた異文化理解の授業実践実施
11月	中学1年生に小中連携を意識した授業実践（Unit8,Unit9）実施
	中学1年生に英語授業についての意識調査実施（3回目）

	1年目(2020年度)	2年目(2021年度)
中学校3年		
中学校2年		
中学校1年		Main Study 2 中学校で週2回授業実践
小学校6年	Pilot Study 小学校で計30回授業実践	Main Study 1 小学校で毎週授業実践
小学校5年		
小学校4年		
小学校3年		

図1. 2年間の実践研究の枠組み

2. これまでの実践の要点の枠組

筆者Aはこれまでの自らの指導を振り返り、上記二つの目標を達成するために中学校で行ってきた指導上の工夫を改めて書き出すとその項目は100を超えた。それらの項目を分類し、「六つの要点と小中学校の状況に合わせた指導の枠組み」とした(図2)。

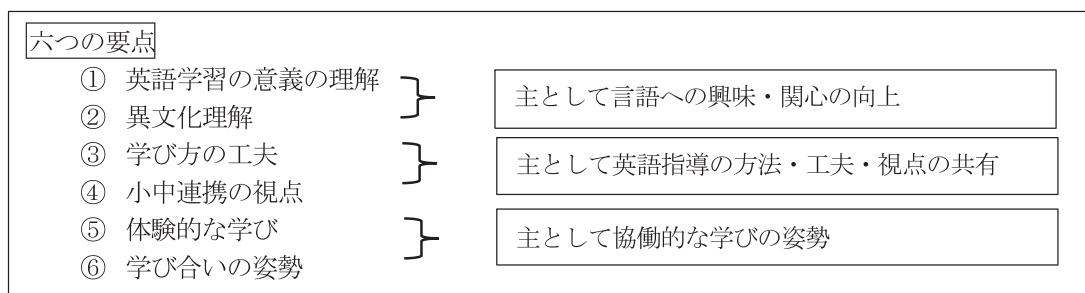


図2. 六つの要点と小中学校の状況に合わせた指導の枠組み

また、小学校教員と協働して外国語(英語)の授業実践をするにあたり、主体的に英語を学ぶ児童を育成するために上記の六つの要点を活かすことはできないか、と考えた。そこで、六つの要点を「主として言語への興味・関心の向上」、「主として英語指導の方法、工夫、視点の共有」、「主として協働的な学習の姿勢」に分類し、小学校教員の要望に応じて様々な支援をしていくことを協働授業実践の骨組みとした(図3)。

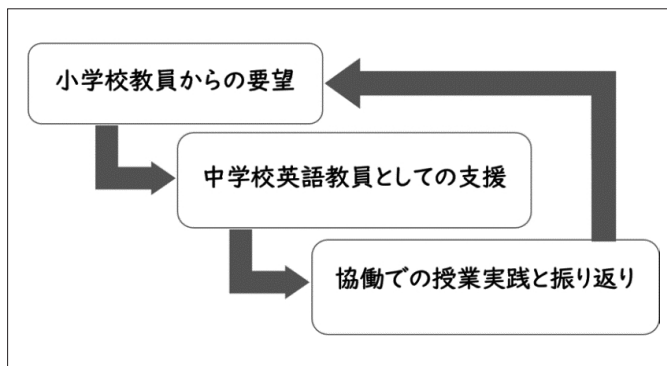


図3. 小学校教員と中学校英語教員の協働体制(支援の骨組み)

3. Pilot Study: 小学校での授業の協働実践（1年目）

筆者Aは中学校英語教師として、小中の外国語（英語）教育について円滑で体系的な繋がりが重要と感じている。その理由は、自分自身の小学校での外国語（英語）教育についての知識が少なく、また授業参観や小学校教員との交流を通して、その様子を知る機会があまりに少ないと感じていたからである。自分の勤務校が中山間地域に存在し、六つの小規模の小学校から子どもたちが入学してくることから、それぞれの小学校で行われている外国語（英語）教育の様子を知り、小学校教員との連携をすることにより、地域の児童生徒が、より外国語（英語）学習に主体的になるのではないかと考えた。

研究1年目は複数の小学校に合計18回、5・6年生の学級を中心に小学校教員との授業協働実践を合計30回行いながら児童の様子を観察した。二つの小学校の5・6年生（50人）を対象としたアンケート調査で、「あなたは外国語（英語）の授業が好きですか」と問うと、94%（47人）の児童が「好き」と答えた。これは、文部科学省が調査した全国平均の72.3%（H26年度）と比較して非常に高い値である（図4）。また、「あなたは英語が話せるようになりたいですか」という質問についても94%（47人）の児童が「話せるようになりたい」と答えた（図5）。実際の授業観察を通して児童たちが、日々外国語（英語）の学習に意欲的に取り組んでいる様子が見られた。

その理由として、授業担当の小学校教員が、自らが間違いを恐れずに積極的に英語を使う様子を見せられていること、挨拶・スモールトークからデジタル教材を用いたチャンツや歌の活動等、教科書の内容をしっかりとした児童観をもとに適切に指導していることが挙げられる。しかし、筆者Aと小学校教員との授業前後の対話や年度末にとったアンケートによる意識調査から、小学校教員が自身の指導についての葛藤や不安を持ちながら日々の授業に取り組んでいることが分かった。

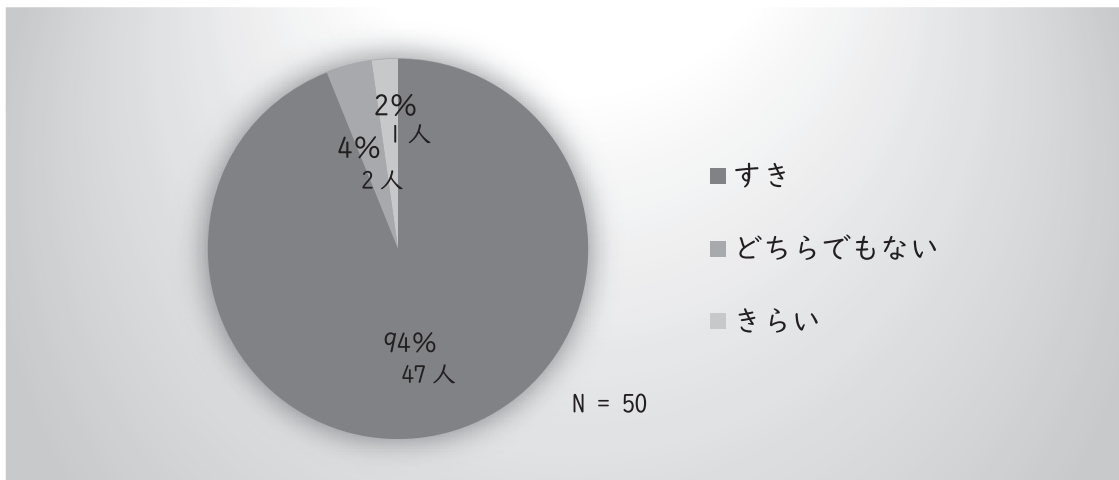


図4. 小学校5・6年生（50人） 外国語（英語）教育についての意識調査
（項目1「あなたは外国語（英語）の授業が好きですか」）

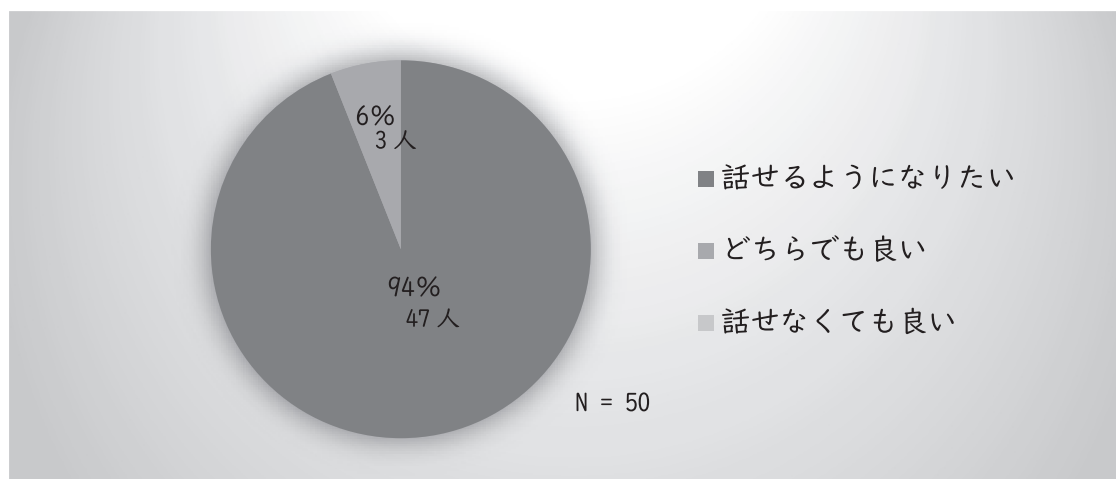


図5. 小学校5・6年生(50人) 外国語(英語)教育についての意識調査
(項目2「あなたは英語が話せるようになりたいですか」)

日々の授業実践に責任感を持って努力する小学校教員と、英語が話せるようになりたいと願う児童に中学校英語教員としてできることは、中学校の英語授業をそのまま投影することではなく、「小学校教員と児童がともにさらに意欲を持って外国語(英語)教育・学習に向かうための支援」なのではないかとの認識を持った。そして、それは中学校英語教員が中心となるのではなく小学校教員たちとの協働で授業を練り上げ、さらに小学校教員たち自身で継続可能な授業スタイルを構築することであるという結論に至った。

表2は、1年目に小学校教員との協働授業実践で行った授業中の活動例だが、いずれの授業実践においても、小学校教員と協働でカリキュラムを作成し、それぞれの強みを活かした授業実践をすることで、児童の外国語(英語)学習への主体性を高めよう取り組んだ。どの授業でも教科書をベースにしながらも、やりとりを中心にした言語活動中心の授業であり、児童の興味・関心を高める素材を扱ったため、児童の主体的な学びの姿勢が見られた。例えば、地元のハンバーガーショップのメニューを用いた言語活動では、嬉々とした表情で英語で注文のやりとりをする姿が授業中に多く見られた。

表2. 実践研究1年目に小学校の外国語(英語)授業で実践した活動例

1	馴染みのある情報(アニメキャラクターを使った3ヒントクイズ)を使った言語活動
2	マイクロプラスチックによる海洋汚染等、環境問題を扱う英語の動画の紹介
3	地元の店で販売される商品の種類や価格を活用した買物のやり取りの状況を設定
4	食糧自給率のデータを用いながらSDGsの視点を取り入れた授業

研究1年目（令和2年度）の3月，中学校英語教員と協働授業実践をしたことへの意識調査のため小学校教員（8人）にアンケートをとった。

質問1「中学校英語教員が小学校で授業することは子どもたちにとって良かったですか」

質問2「中学校英語教員と授業の協働実践をしたことはあなたにとって良かったですか」という二つの項目に関しては全員が「良かった」と答えた。

質問1の理由としては、

- ・中学校という『見えない壁』を少しでも『見える化』したり、…（中略）…児童が中学校の先生を覚えて仁多中に行くことを楽しみにしている様子も多く見られてありがたかった。
- ・外国語専門の先生ということで、子どもたちもやる気満々だった。普段なかなか自信を持って発言できない子どもに対しても、自信を持たせるような声かけ、雰囲気づくりをしていただき大変感謝している。

といった小中学校の教員による協働実践を肯定的にとらえるものが多かった。また、質問2の理由としては、「中学校英語教員との英語指導の方法・工夫・視点の共有」を肯定的評価の理由として挙げる教員が多かったが、個々の児童に応じた対応や児童理解の共有をもとにした小中教員の協働を理由に挙げた教員もいた。特に後者については1回きりの授業の協働実践では感じられない意見であり、複数回に渡る授業の協働実践によって得られた意見だと考えられ、小中連携を体系的、定期的に行うことのメリットだと捉えた。

また、「普段から最低限のことはやっているつもりだが、自分自身の英語力に自信がないので、中学校英語教員に相談に乗ってもらいながら授業を進められたことは、自分にとっても自信になっている。」という意見もあり、前述の小学校教員の英語指導についての不安感が垣間見えた。イーオンが、2019年夏に小学校教員向けに全国で開催した指導力・英語力向上セミナーで現役小学校教員270名を対象に実施したアンケートによると、小学5・6年生に英語を「教科」として教えることについて、「自信がある」との回答は2%、「やや自信がある」との回答は27%にとどまり、「あまり自信がない」48%、「自信がない」18%、あわせて66%は自身の指導に不安を感じていることが明らかになっている。筆者Aの行った小学校教員への意識調査からも、授業の協働実践以前は「英語が専門ではない自分の授業を英語が専門の中学校英語教員に見られることへの恥ずかしさ」や「指導方法について指摘されることへの心配」という意見が見られた。小学校では英語が専門でない教員が大半であり、円滑な小中連携によって、特に地域の中学校英語教員と定期的に協働授業実践の機会を持つことがその不安感解消に貢献できると考えた。

4. Main Study 1：小学校での授業の協働実践（2年目）

研究2年目の令和3年度は、年度始めに中学校英語教員との協働授業実践について各小学校に希望を取り、希望があった五つの小学校で毎週又は隔週の頻度で定期的な授業の協働実践を続けた（図6）。授業の流れは、小学校の担当教員が計画したものに中学校英語教員ができることを授業の支援として付け加える形で計画した。授業中はT2として授業の進行や児童の様子を見取り、英語の発音や文法の説明など、その場で必要だと思われる支援を心がけた。さらに英語の指導だけでなく、小学校での学習が中学校でどのように発展していくのかを伝えることを意識した。

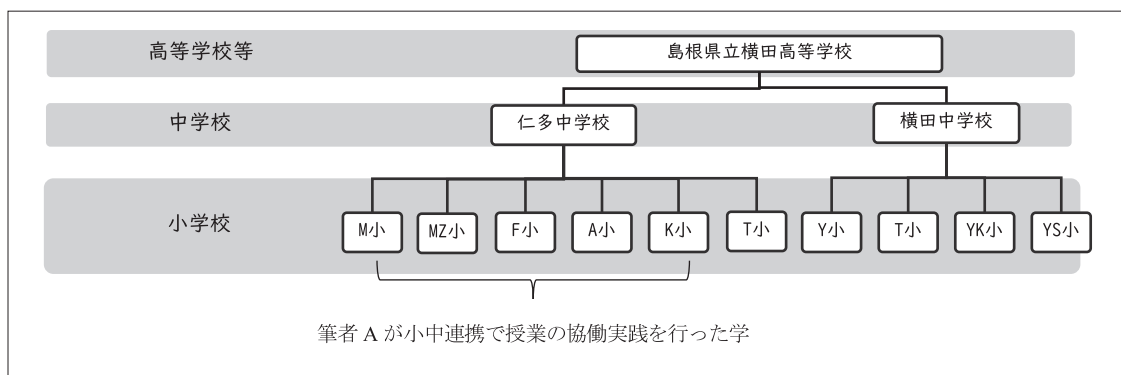


図6. 奥出雲町内の小中高等学校と筆者Aが小中連携で授業の協働実践を行った学校

どの授業の活動においても、T1である小学校教員の指導上の要望から、上記の枠組みや要点を活かした指導の工夫を共に考え、実践後の児童の様子の観察や振り返りから実践の評価を共有し、次時につなげることで、小学校教員が「子どもたちが意欲的になった」「この指導は小学校教員だけでもできる」と自信を持つことができるようになることを目標にした。令和3年度は小学校で、ほぼ全ての単元で授業の協働実践をしたが、その取り組みの一つを以下に紹介する。

小学校5年生New Horizon Elementary Book 5（東京書籍,2020）Unit 4 “He can bake bread well.” 「代名詞he/sheと助動詞canの導入と活用」の授業では、担任教員と英語教員の役割分担を明確にし、英語教員による学習内容の導入によって英語に親しみ、担任教員を手本にした自己表現活動をした。協働実践前に担任教員から次のような要望があった。

教員本人の家族を絵や写真を見せながら3ヒントクイズ形式で、答えを想像させ、助動詞canや、代名詞he/sheに自然に触れさせたい。リスニングを行い、最終的に自己表現活動につなげる。デジタル教科書を使って、チャンツや歌の指導、リスニング教材の活用はできるが、子どもたちはhe/sheの区別が難しいようで、子どもにとって分かりやすい学習内容を望んでいる。

この要望に対して英語教員として指導の工夫を提案した。指導で活かされる要点は、③学びの工夫 ⑤体験的な学びである。助動詞canや、代名詞he/sheについて文法的に理解することよりも、実際に音を聞いたり、文字を見たりすることで感覚的にその違いを意識させる。中学校英語教員の用意した3ヒントクイズを全て英語で行うことによって、児童の興味・関心をひきながら、英語に慣れ親しませる（図7）。その後、担任教員が作ったクイズで助動詞canや、代名詞he/sheを使って、それらを深く理解させ（図8）、最終的には、相手に伝える意識を持って自分の3ヒントクイズを作る活動につなげた。



図7. 中学校教員の例題クイズで慣れ親しみ



図8. 担任教員のモデルクイズでより深く理解

授業回数を重ね、実際に何度も話したり書いたりすることにより助動詞canや、代名詞he/sheについての知識・技能は高まっていった。授業後の児童の振り返りからも、「今日はHeとShe, canとcan'tを使ってやってみて違いがよくわかったし、すごく楽しかった。」「難しかったけど、覚えられてうれしかった。」「前はhe/sheの言い方も良くわからなかったけど、クイズで楽しく覚えられた。」という記述が見られた。

令和3年7月、中学校英語教員が、奥出雲町内の五つの小学校の外国語の授業に関わるようになって1年が経った頃、5校の小学校6年生計40人に「中学校英語教員と授業をすることについて」4件法でアンケート調査を行った。

質問1「中学校の英語の先生といっしょに英語の勉強をするのはよかったですか。」という問いに対しては全体の98%である39人が、「とても良かった」と回答した。1名の「まあ良かった」を含め全員が肯定的な回答をした。その理由を質問2の答えとして以下に記す。

質問2 そう思ったのは、どうしてですか。

(授業への主体性に関わる回答)

- ・楽しかった。楽しく学べた。(複数)
- ・知らないことが知ることができた。(複数)
- ・色々な英語やゲームが楽しい。←(「まあ良かった」と答えた児童)
- ・英語が好きになった。楽しみになった。(複数)
- ・日常生活で使えるような言葉を教えてくれた。
- ・習った英語を、中学生のお兄さんに自慢できるから良かった。

(学習内容の分かりやすさについての回答)

- ・英語を楽しく分かりやすく教えてもらった。(複数)
- ・授業の途中途中でわからない単語を説明してくれてすごくわかりやすかった。

- ・聞くときや言う時の発音がわかった。
- ・発音などを口の動きで説明して分かりやすく教えてくれた。
- ・説明が丁寧で分かりやすかった。(複数)
- ・いつもとは違う方法で英語の言い方が覚えられたので良かった。
- ・発音がすごく良く分かったし、わからないところをたくさん教えてくれた。
- ・単語の覚え方とかを面白く教えてくれた。(ダジャレで覚える方法など)
- ・面白いだけじゃなくて、ちゃんと覚えられるし、覚えやすかった。

(中学校への接続についての回答)

- ・小学校では習わない英語を知ることができた。(複数)
- ・中学校ですることもしっかりわかってきた。中学校での勉強も身についた。(複数)
- ・中学校の先生と一緒に勉強して中学校での勉強の仕方がちょっと分かった。
- ・中学校でも教えてもらったことを活かしていきたい。

質問1では全体の98%である39人が、「とても良かった」と回答した。1名の「まあ良かった」を含め全員が、肯定的な回答をした。しかし、中学校英語教員が小学校の授業に最初に参加する前は、児童にとっては不安感や恐怖感に似たものがあつたはずだ。筆者Aが、最初に各小学校を訪れた際は、児童の態度に明らかに身構えるものがあつた。これこそが、小中の壁であり、小中連携で取り扱うべき最初の障壁であると感じた。1年目の授業参加は学校によってはスポット参加のいわゆる「ゲストティーチャー」としての形であり、筆者Aは自己紹介からはじめ、努めて楽しい指導・活動をしながら、中学校英語教員として児童が実際に英語を使うことを通して、新たな言語(知識・技能)を学ぶことの楽しさを伝えようとした。

質問2で質問1の理由を問うたが、特に注目したいのは「学習内容の分かりやすさ」について答えた児童の意見だ。小学校教員の多くは英語が専門ではない。よって、多くの教員が教科書の指導書通りに授業をすることが多い。指導書通りに授業をすれば、文部科学省及び教科書会社が必要だと思われる内容の指導につながるだろうが、それを「分かりやすく指導する」、「児童が興味関心を持って学べるように導く」という観点では個々の教員に委ねられる点が多く、そこで中学校英語教員との協働が活かされると考える。具体的には、英語の発音の正確性や単語をはじめとする語句の指導が挙げられる。児童の「言いたい」「表現したい」と願う気持ちに正確に応える、または自ら進んで調べ知識・技能を獲得するよう導くことについては英語の専門教員との連携が効果を発揮する。知らないことを知る喜び、できなかったことができるようになる喜び、できたことを専門教員に褒められたときの喜びを通して、児童の学習への意欲をさらに向上させることができると考える。

では、英語が専門ではない小学校教員だけの授業が不十分かと言えば、もちろんそのようなことはない。担任教員をはじめとする小学校教員には外部の人材(中学校英語教師や英語の専科教員、またはALT)にはない、深い児童理解がある。粕谷(2019)は、新学習指導要領では、「目的・場面・状況」の適切な設定の重要性が強調され、本当に意味のあるやり取りが展開される授業への展開が求められている点を指摘し、その適切な設定をするのにほぼ一日中見

童と過ごしている担任教員が最も適していると述べている。また、小学校教員は『ありのまま』で、英語に苦手意識を持っていても、「子どもたちが覚えるべき手本」ではなく、「このことを言いたいときは、英語でこう言う」という生きた手本を示してほしいとしている。児童理解があり児童に最も近い担任教員と中学校英語教員をはじめとする外部人材との協働によって、その効果が大きく向上すると考える。

先にも述べたように小学校教員のみでの授業は教科書の内容も多く、学習内容を取捨選択することも容易ではない。必然的に教科書を中心にした授業になりがちであるため、その児童の学習への希望を踏まえて学習内容を広げ、深め、対話的にし、さらに中学校以降の進路での学習につなげるためにも小学校教員と中学校英語教員との協働が効果を発揮すると結論づけた。

5. Main Study 2 : 中学校での授業実践 (2年目)

研究2年目は、小学校での授業実践と並行して、勤務校である仁多中学校の1年生への授業実践にも取り組んだ。仁多中学校1年生(49人)は、筆者Aが研究1年目に小学校での授業実践で指導に関わった生徒であり、彼らが中学校入学以前に全員と面識があった。その生徒たちの指導に関わりながら、4月、7月、そして11月の3回、英語教育についてのアンケートによる意識調査をとり、その変容を追った(表3)。また、筆者Aがこれまでの中学校英語教員として実施してきた六つ要点を三つの枠組みに分類し、「主として言語への興味・関心の向上のための支援」(①英語学習の意義の理解, ②異文化理解), 「主として英語指導の方法, 工夫, 視点の共有のための支援」(③学び方の工夫, ④小中連携の視点), そして「主として協働的な学習の姿勢のための支援」(⑤体験的な学び, ⑥学び合いの姿勢)を活用した授業実践を行った。

また,11月には筆者Aがこれまでの中学校英語教員として実施してきた六つの要点と小学校外国語(英語)学習の視点を活用し,単元を通じた授業実践を行った(図9)。具体的には,学び方の工夫と小中連携の視点として,小学校で使用した教科書や画像資料を用い,小学校の授業でも行われているスモールトークなどの言語活動を取り入れた。

表3. 中学1年生への外国語(英語)学習についてのアンケート

大項目	4月	7月	4月からの増減	11月	7月からの増減
英語の授業が楽しい	92%	95%	3%	98%	3%
学習内容が理解できている		79%		81%	3%
小項目	不安がある	自信がない	4月からの増減	自信がない	7月からの増減
話すこと	53%	40%	-13%	54%	14%
聞くこと	29%	23%	-5%	29%	6%
読むこと	65%	51%	-14%	46%	-5%
書くこと	60%	64%	4%	67%	3%
単語	47%	49%	2%	54%	5%
文法	35%	30%	-4%	40%	10%

6 本時の学習 (3 / 6 時間)

(1) 目 標 現在進行形の疑問文の文構造を理解する。 【知識・技能】

(2) 展 開

学 習 場 面	教師の支援	評価 (方法)
1 あいさつをする。(3分)	教員や生徒と英語で対話をし、英語学習の雰囲気作りをする。	
2 歌 前時の授業で学習したサビ Chorus を中心に ing が多用されていることに注目して歌う。(5分)	歌いやすいように部分的に練習する。	
3 本時の流れとめあてを確認する。(3分) <本時のめあて> 「人やものが今していることの聞き方を理解する」 1 He is listening to music. 2 Is he listening to music? 3 What is he doing now?	これまで学習してきた動詞の表現から現在進行形の表現の必要性 (役割) を伝える。	学習の意義の理解
4 ジェスチャークイズ (単元のゴールの明確化) 録画されたジェスチャークイズをグループで協力して考え、ホワイトボードに書く。(10分)	映像を使って理解し、発言しやすく支援する。	小中連携の視点
5 教科書本文 P.80 のモデルリーディング (ALT 等 複数の教員で指導がのぞましい。不可ならデジタル教科書使用) (5分)	生徒の状況を観察しながら、ポイント (文法、語句) を意識するように指導。	観察
6 キーセンテンスの練習 (7分) (教科書 P.79 デジタル教科書の文法解説動画使用)	生徒の理解の状況を把握し、必要な補足説明をする。	観察
7 新出単語や表現の確認と指導 (ALT) (5分)	ALT と協力して意味や用法が生徒の印象に残りやすいように工夫する。	学び方の工夫
8 ワークシートでまとめ (5分) ・ワークシートで本時の学習内容を確認する。 ・授業の感想を、ワークシートに書く。	本日の授業のポイントを改めて示唆。次の授業の指示を確実にする。	観察
9 感想 次時の指示 (2分)	復習や準備を明確に指示する。	

(3) 本時の具体的な生徒の姿の例と支援

十分満足と判断される生徒の例 (A)	現在進行形の疑問文の意味用法について十分理解しており、現在形との使い分けができる。
--------------------	---

図9. 小中連携の視点を筆者Aの指導の要点を取り入れた中学校での授業実践
東京書籍 New Horizon English Course Book1 Unit8 3時間目

令和3年7月と11月には、同じ生徒を対象に中学校の英語学習についてのアンケートによる意識調査をした。その内容は、大項目としての英語の授業を楽しんでいるか、学習内容が理解できていると感じているかに加えて、小項目として「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「単語の習得」「文法の理解」についての自信の有無についての意識調査をした。小項目に関しては、4月のアンケート調査においては、「不安の有無」として調査している。7月アンケートの「英語の授業は楽しいですか」という質問に対して95%の生徒が肯定的な回答をした。項目別では、「話すこと」についての不安感（自信のなさ）は13ポイント減少した。また、「聞くこと」に関しては「不安がない」と答えた生徒の割合は4月の7割に対し、7月は8割近い生徒が「自信がある・やや自信がある」と答えた。これは、小学校の外国語の授業で中心に置かれていた「話す・聞く」の活動やコミュニケーション活動に慣れ親しんでいたこと、中学校の英語の授業でもスモールトークや英語でのやりとりを積極的に授業に取り入れていたことが理由だと考えられる。

11月のアンケート調査では「英語の授業は楽しいですか」という質問に対しては98%の生徒が肯定的な回答をした。「楽しくない」と答えた生徒は4月の4名、7月の2名を経て11月には1名になった。そして、「学習内容が理解できていると思う」と答えた生徒の割合は7月の79%から2ポイント増の81%になった。しかし、小項目である各領域等についての自信の無さを比較すると「話すこと54%（14%増）」「聞くこと29%（6%増）」と、それぞれ自信の無さが増加した。この理由としては、7月までの学習内容が小学校での学習の復習的な内容であったのに対し、2学期以降は、教科書の内容も文法構造を強く意識した内容になっており、生徒たちにとっては英語という言語を構造的に理解し、発信する力が求められたため、難しいと感じる生徒の数が増えたせいではないかと推測される。

また、「小学校の外国語の学習で中学校の英語の学習で役に立っていると思うこと」という質問の答えとして多く見受けられたのは、小学校で実際に聞いたり、使ったりした語句である。小学校の学習では、文法に関する知識の習得は求められていない。しかし、目的・場面・状況に応じて、英語で自己表現する活動が多く行われている。その際に使用した単語や表現が中学校での学習で表出した際に、小学校での学習が役に立ったと思う生徒が多かったため、11月の授業実践では小学校の教材を振り返る活動を取り入れた実践をした。授業実践を行った後のアンケート調査で「授業の内容が理解できる」と答えた生徒の割合が4月、7月の調査よりも上がっており、生徒に対してより分かりやすい授業を提供できた。

V 本研究のまとめ

2年間にわたる小学校教員との授業の協働実践を通して小学校教員が、中学校英語教員との授業の協働実践について、英語指導の工夫や視点の共有といった点に大きな価値を感じることが明らかになった。また、中学校英語教員である筆者Aにとっても、小学校教員との協働によって小学校の外国語（英語）教育についての理解を深め、中学校での英語指導に活かすことによって、指導の視点が広がることが実感できた。児童生徒の授業中の様子や振り返りからも、小中連携によって教員同士がつながり、指導の視点や方法を共有することで安心して学習に取り組める様子も観察できた。

本研究の成果は次の4点である。

- ・ 中学校英語教員として小学校での外国語（英語）学習についてカリキュラムと、小学校教員の児童観に基づいた児童への接し方の両面を深く理解し、中学校での授業実践に活かしたことにより、子どもたちが中学入学後も大きなギャップを感じることなく主体的に英語を学ぶ様子が見られた。
- ・ 小学校での継続的な協働授業実践や小学校教員への調査を通して、T1である小学校教員の要望に応じて、T2の英語指導の専門家としての支援をするという骨組みを明確にすることができた。
- ・ 観察やアンケート調査を通して、児童が外国語（英語）学習に強い興味・関心を持っていることが明らかになり、中学校英語教員からの適切な声かけ等により児童の主体性が向上することが明らかになった。
- ・ 小学校教員の中には「自分の指導不足への指摘」や「中学校英語教員の児童への関わり方」への心配や不安を持つ教員もいたが、中学校英語教員との協働授業実践を通してそれらが軽減または解消され、小中連携の効果を肯定的に捉える意識への変容が見られた。

小中両校での指導法及び教材についての情報共有をすること、小学校教員と中学校英語教員のもとと持っている強みの活用し、互いが他の強みを活かす関係づくりをすること、さらにそれぞれの教員が児童生徒との心的距離（親しさ、立場）の活用することにより、小中学校の外国語（英語）授業の充実に繋がる。小学校教員と中学校英語教員との小中連携の効果を相互に肯定的に捉える意識の醸成をすることが重要であるとの結論に至った。

本研究を通して外国語（英語）教育における小中連携は、児童生徒、及び教員にとって効果が高いことが明らかになったが、今後も継続的に外国語（英語）教育で小中連携を進めるうえでは、協働授業実践の授業時間やそのための打ち合わせ時間の確保等が課題となり得る。これらを個々の教員ではなく、教育委員会、管理職、そして他教職員の理解と協力のもとに、小中学校双方の歩みよりによって、実現させていきたい。

主要引用・参考文献：

- ・ 粕谷恭子（2019）「わかる・できる！英語授業のひと工夫 明日から使える26事例」光文書院
- ・ 株式会社イーオン（2019）「小学校の英語教育に関する教員意識調査2019」
- ・ 川上典子（2014）「小学校英語教育：小中連携の取組」『鹿児島純真大学 国際人間学部紀要』20,63-81頁
- ・ 直山木綿子（2020）「小中連携の必要性」『調査研究シリーズ No.84 小・中学校の滑らかな接続を目指した英語科学習指導の研究』,14-21頁, 日本教育文化研究財団
- ・ 中村有佐（2010）「小学校英語の本質を知り、小中連携を進める」『英語教育通信2010年秋号』, 6-9頁, 教育出版
- ・ 三浦由美（2017）「小中連携による外国語活動の充実化 - 小学校の教員と中学校の教員とで作り出す協働的な授業 -」東京学芸大学教職大学院年報, 第6集, 37-48頁

- ・ 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領 (平成20年告示) 解説 外国語編』
- ・ 文部科学省 (2014) 「今後の英語教育の改善・充実方策について (報告) ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
- ・ 文部科学省 (2015) 「小学校英語の現状・成果・課題について」
- ・ 文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語編』
- ・ 文部科学省 (2017b) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語編』
- ・ 文部科学省 (2018) 「平成26～29年度外国語 (英語) 教育強化拠点事業」
- ・ 文部科学省 (2020a) 「令和元年度公立中学校における英語教育実施状況調査」
- ・ 文部科学省 (2020b) 「外国語教育の抜本的強化のイメージ」
- ・ New Horizon Elementary English Course 5 (2019) 東京書籍
- ・ New Horizon Elementary English Course 6 (2019) 東京書籍
- ・ Picture Dictionary (2019) 東京書籍